# 「訓練校で思うこと」

やきもの成形科総合コース　加藤まり香

京都でやきものの勉強を始めて、もう一年四ヶ月経つ。去年の春、故郷である宮城の田舎町を出たときは震災の直後であった。瓦礫の山を前に、「この町は変わらないでほしい」とはとても思えない状況が辛かった。何もかも変わってしまった。喜ばしいはずの旅立ちが、先の見えない不安でいっぱいだった。

しかし入校して訓練が始まると、そんな感傷に浸っている場合ではなくなった。実家が窯元ではあるが殆どろくろの経験がない私は、土を揉むこともままならなかった。二週間が過ぎても、ろくろに座ることさえ出来ず、訓練開始から終わりまでずっと土を揉む練習を続けた。大汗をかき、筋肉痛になりながら、自分の体はろくろをひくには貧弱なのだと知った。加えて、職人として何を求められているか察知して機敏に動く能力が、全然足りていないことも知った。先生に叱られ、しょげてしまう心の弱さにも気付かされた。不甲斐ない自分を目の当たりにするうちに、すっかり意気消沈してしまった私は、訓練にあまり集中できなくなっていた。

そんなある日、休日に母へ電話をかけた私は、母の声を聞いた途端に大泣きしてしまった。津波で窯を流されて失業した両親は、この頃ボランティアを集めて必死に瓦礫撤去をしている最中だった。被災して本当に大変なのは、復興までの日々である。その中に居られないことへの罪悪感と無力感、未熟な自分への苛立ちが、一気に溢れてしまった。

「今の私、何もできない。こっちは、そっちと、何もかも違いすぎて、気持ちが整理できない。」そうこぼすと、母はそれについては何も言わず、ただ日々の出来事を語ってくれた。ボランティアの皆さんと力を合わせて毎日頑張っていること、お客様から激励の電話が来ること、絶対に窯を復興すると決めたこと、電話を切った後、私は今自分がここにいるのは、周りの協力なくしてはあり得ないことだと思った。両親の窯の復興がそうであるように。沢山のひとに助けられて、今こうして勉強できている、そのことに感謝して、もっと謙虚になり、必死になるべきだったのだ。

訓練校での日々は、毎日がそんな気付きの連続である。一年が過ぎて、当たり前のようにろくろに座れるようになって、ほんの少し製品を作れるようになった。今でも時々失敗して、反省して、自分の未熟さを思い知る。それは幸せなことだ。今私は先生や両親や友達、その他大勢に助けられてここにいる。そしていつか、同じように、私も誰かを助けたい。そのために、今はとにかく必死で前に進もうと思う。